周辺からの記憶 27

# 2017年度　岩手・福島

村本邦子（立命館大学）

2月27日、アボリジニの調査でブリスベンに滞在中、安倍首相が、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、全国すべての小中高校と特別支援学校について、3月2日から春休みに入るまで臨時休校するよう要請したというニュースが飛び込んできた。一緒だったメンバーたちが、その間、子どもをどうするかでざわめき始め、仕事のキャンセルの連絡も入り始めた。同日、大学からも、卒業式と入学式の開催を中止するという連絡が入った。帰国し、あれよあれよという間に、楽しみにしていたイベントや仕事の中止の連絡が入り続ける。なるべく日常を維持したく、自分からのキャンセルはせず、3月 10・11 日の東京出張は決行した。メインの目的だった福島関連のシンポジウムは流れたが、共同研究者、編集者との打ち合わせ、第五福竜丸展示館訪問である。

4月7日のハラスメント研修や教授会は、通常通りキャンパスで開催されたが、同日、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡に発令された5月6日までの「緊急事態宣言」を受け、立命館大学も全キャンパス入構禁止、授業はすべて休講となった。外出自粛で、買い物と散歩以外、自宅から出れなくなったので、私は、人生稀にみる暇人となった。でもまあ、考えてみれば、私の人生は不要不急のものばかりである（個人的には、不要不急こそ人生だと思っている）。もともと“living with virus”を主義としているが、今回ばかりは、自分は元気でも無症状者としてリスクの高い人に感染させるかもしれないというのがネックである。コロナ禍が私を土地に縛り付けた。元気なうちはあちこち飛び回って、年を取ったらゆっくり近場を回ろうと計画していたが、結果として、今回、近所を歩き回ることになった。そして、地元大阪の「土地の力」を見つけている。歴史を経て伝承されてきた災禍や民話や祭り他、これらも証人として記録に残さなければと思いつつ、今のところフェイスブックのメモ程度である。まずは、ここに少しだけ記しておこう。

## 2017年11月 岩手

### 11月2日(木)～3日(金)
### フィールドワーク

一泊前乗りで花巻空港着。レンタカーを借り、平泉と厳美渓を経由して、宮古のプロジェクト前にほぼ毎年訪れる臨床心理士の友人河野暁子さんと会うために大船渡へと向かう。どこもかしこも紅葉が美しい。

早く到着したので、盛駅の歩道橋から線路を眺め、三鉄の盛駅に行ってみる。コミュニティスペースは、もうなくなっていた。そろそろ震災も過去のことになったということなのだろうか。JR盛駅の方の待合が逆に広くなっていて、山田線11月5日再開（昨年の台風10号の土砂崩れで再度不通となっていた）のポスターやBRTについての説明版などが設置されていた。

ポルコロッソで1年に一度のおいしいイタリアンを食べながら、河野さんと話し込む。

朝、大船渡温泉から美しい海の景色を見て、人間の営みも自然の一部なのだと感じる。即座に原発を思い、複雑な気持ちになった。

思い立って、朝、大船渡プラザホテル周辺に行ってみる。2012年、初めて大船渡に来た時に泊まったところだ。周囲は地盤沈下であちこちに水が溜まり、ホテルの半分はまだ修理中だった。今、プラザホテル周辺には商業施設がたくさんできていて、キャッセン大船渡フードビレッジ、かもめテラス、ライブハウスまでできていた。ホテルは何だか小さくなっているように見えたが、後で聞くと、実際に小さくなったんだそうだ。このあたりは、かさ上げしなければならない地区に指定されたため、2012年に泊まった半分も取り壊され、新築したのだそうだ。

周辺は、商業施設と防潮堤の工事でにぎわっている。大船渡にはコンクリート工場があったために復興が早いのだそうだ。元JR大船渡駅の後に行ってみると、線路はなくなり、工事中だった。BRTの大船渡駅は別にある。

駅に戻る途中、ガソリンスタンドによると、お兄さんが「レンタカーですね」と言うので、時々、様子を見に立ち寄ることを伝え、「復興どうですか」と聞いてみると、「大船渡はもう復興してますよ」と明るく答えてくれた。商業施設もたくさんできて、たくさん人も来るとのこと。

駅前で車を返し、河野さんの車で北上。延々と防潮堤の工事が続く。田野畑のサッパ船アドベンチャーに参加することにして、時間調整に鵜の巣断崖に立ち寄った。

体験村たのはたネットワークには、「番屋」がたくさん並んでいる。船着き場で同乗する予定の団体を待っている間、中机船長のお話を聞く。ここの船も全部持っていかれたが、一艘だけは沖出しして残ったものだという。ちょうど昆布漁に出ていて、とっさの判断で沖に出て、一夜過ごしたのだそうだ。

船で 1 時間、北山崎の展望台下あたりまでいく。なかなか楽しい。一緒になった団体さんは香川県から来ているという高齢者 14 人、元気なグループだった。

船長さん（上村繁幸さん）は地元の漁師さんで、震災の話もしてくれる。発着口から見える断崖の上に赤い旗の印。上村さんがつけたという。そこまで津波がきたのだそうだ。このあたりには番屋が 25 棟あり、百選に選ばれたが、被災してすべて流された。番屋エコツーリズムの HP https://tanohata-taiken.jp/?page_id=64 によれば

現在机浜番屋群は震災の大津波により流失後、2015 年 4 月に再建されております。震災以前同様漁業と観光の融合した施設として活用されておりますので、お気軽にお立ち寄りいただける施設となっております。

「番屋」は本来、冬に人の引き上げた後、漁場を管理する必要から越年して滞在するための番小屋をいいました。これがのちに漁夫の寝泊りする漁場施設を指していうようになります。ニシン漁が盛んだった北海道西海岸一帯の漁村では、漁船や網を持って多くの漁夫を使う親方の住まいと漁夫の宿泊部を一棟の中に収め、豪放で機能性に徹した大型民家が「鰊番屋」と呼ばれて有名です。

机浜に現存する 25 棟の建築群は主に漁具の収納やワカメ、コンブの乾燥作業場を目的にしたもので、住居は時化や津波の被災から守るため、そして農耕や炭焼きをするために高低差約 200 メートルの高台に建てられました。その意味ではこの建築物は「納屋」と呼んだほうがふさわしいのですが、漁期で忙しくなると今でもこの施設に泊まりこみ、「番屋」としての機能も持ち合わせているのです。

「机」の地名はアイヌ語のツク・エツ（小山の・岬）が由来で、浜の周囲は北部陸中海岸特有の断崖絶壁が連なり景色がすばらしいところです。机漁港はウニ、アワビなど磯漁業の拠点として古くから利用さ

れてきましたが、昭和 43 年度から漁港整備が行われ、さらに漁港と集落を結ぶ道路も整備されてからは利便性が向上しました。現在では磯漁業のほか、ワカメ、コンブの養殖が中心となっています。この環境整備で、漁具は車を利用し集落まで運搬できるようになり「納屋」としての機能も失われつつあります。

社会環境整備や車の普及、漁業後継者不足で番屋の遊休化、廃屋化が進み、急速に漁村文化が失われようとしていましたが、「机郷友クラブ」による保存・継承活動が元で、平成 18 年水産庁の「未来に残したい漁業漁村歴史文化財百選」に選ばれ、貴重な漁村の原風景をとどめる所となっております。

上村さんの家はそこから続く坂道を上った高台にあり、そこから見ていたそうだ。道の駅たのはたで豆腐田楽と七色まん（にじまん）を食べ、龍泉洞に寄って宮古へ。メンバーと合流し、よし寿司で海鮮ちらしを食べながら打ち合わせをする。

## 11月4日（土）宮古でのプロジェクト

8 時半に待ち合わせ、会場へ。魚菜市場の漫画展示がなかなか良い感じ。朝取り野菜市場と自然に一体化している。通りすがりのお客さんも読んでくれている。打ち合わせ。自己紹介をし、手順を確認。

9 時半から 15 分程、市長が来る。鷺田さんがとても喜んでいて、集合写真を撮った。市長も 10 年計画には驚いたようだった。FB に写真をあげるとのこと。

漫画トークは誘導に工夫が必要だが、30 人くらい入ったのではないか。市場で磯ラーメンを食べてから支援者支援セミナーの打ち合わせをする。

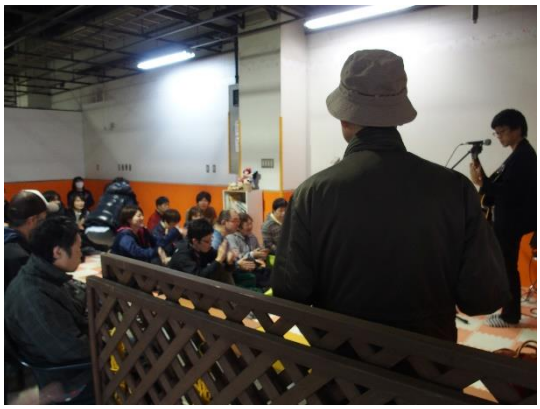
午後は、キッズコーナーで、「アートで遊ぼう」と「故郷の歌や昔話」。輝きの和の絵本読み聞かせの後、シンガーソングライターの小林星（セイ）さんが、宮古の伝統菓子、餃子に似た「ひゅうず」とずんだで作る「すっとぎ」の作り方の歌を歌ってくれる。クックパッドで調べた自作の歌だそうだ。マイクは市場全体に通っているため、それを聞いたお菓子屋のおばちゃんが「すっとぎ」の実物を持って駆けつけてくれる。少ししかなかったのでと、小さく切って爪楊枝をつけ、みんなで食べられるように。魚屋さんでも、「立命さんが・・」と噂話をしていて、市場で温かく受け入れられていることを感じる。

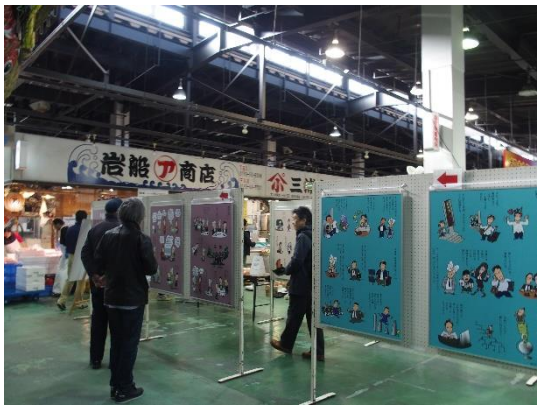
絵本は「鬼より強い嫁」、紙芝居「ふたごの星：宮沢賢治」と自作の「しろこ地蔵」スキップの利用者さんがとてもよく笑い、楽しい時間だった。

支援者支援セミナーも 2 時間かかったが、全体的に良い手ごたえで終わる。被災地での事例には被災の陰が見える。支援者たちが親切すぎて、当事者が動かなくて安定してしまっているように感じた。

片付け、打ち上げ。宮古の児相、盛岡の児相から 2 名ずつ来てくれていて、鷺田さんがとても喜んでいる。所長も、市場の近所で漫画冊子の評判に少し評価が変わったようだった。時間経過の成果がようやく相手に伝わったかと思えた会だった。

両親/夫婦/親子




商店

## 11月5日(日) フィールドワーク

9時にホテルを出発、田老の学ぶ防災へ。いつものガイドさんが喜んで迎えてくれる。

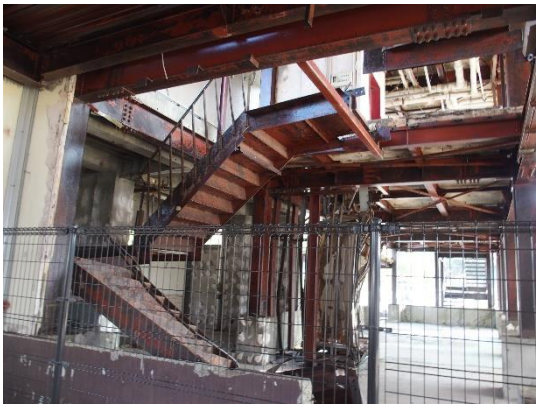
最初にガイドを始めた時、来てくれたのが立命館の学生だった。人口が減ってきていて、時々心細くなる。毎日いると変化がわからないが、たまに来てくれる人が「変わりましたね」と言ってくれると「そうか〜」と思える。

防潮堤が進んでいて、囲まれていく。最初の予定とは違ってきている。大切な水門遺構を残して欲しかったが、ある日、突然、コンクリートで閉じられてしまった。二重に築造された津波防潮堤頂部に取り付けられた防潮堤頂部のブロックは763あり、これは昭和の大津波の地区犠牲者数と一致し、鎮魂の墓標であったかもしれないと言われている。

もともと防潮堤は津波をなくすものではなく、時間をかせぐものだった。実際、通常10分のところを10分かせぎ、20分あった。避難路もどの家からも10分で逃げられるようにできていた。田老は死者が少ないとよく言われるが(1.7%)、ゼロのはずが多すぎる。それだけ伝承は難しい。

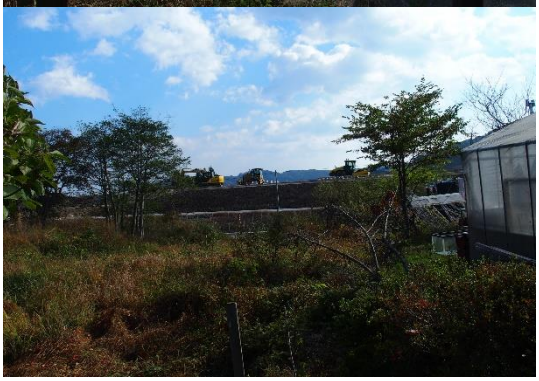
子どもたちが、自らの判断で山道に並び、乳幼児をバケツリレーのように避難させ、お年寄りをおぶったり押したりして全員助かった。子どもたちは、防災の知識を学校で習ったと言っている。外から嫁いできた女性が、村に溶け込もうと、おじいちゃんやおばあちゃんとよく話していたので、津波がくると皆によびかけ、たくさんの人が助かったという話もあった。

場所を移動して、震災遺構に指定された旧「たろう観光ホテル」の６階に上り、ホテルの社長さんがビデオを回した部屋で、海を見ながらビデオを観る。津波はこの建物の３階まで到達した。津波が建物にぶつかった瞬間、カメラが大きくブレて天井に向いたことがわかる。



車で南へ１時間ほど下り、「風の電話」のある大槌町の鯨山ガーデンへ向かう。

ガーデンに着くと、三陸自動車道の工事が進行中で、かつて海を臨んでいた風景が完全に遮られていた。春には道路が完成し、仙台まで２時間余りで行けるようになるが、残念なことである。何か磁場が変わってしまったような感じがした。



それから、毎年必ず訪れて、定点観測している城山公園から街を眺める。ずいぶん変化があって、大きな建物を建築中だった。来年は街ができているのだろうか。

最後に、今年も、遠野の民話の語り手である大平悦子さんのお宅にお邪魔した。萱葺き屋根の古民家だ。囲炉裏端で、薪から立ちのぼる煙に燻されながら、民話を聴かせてもらった。まずは、遠野物語第 99 話だった。明治 29 年の三陸大津波にちなんだ幽霊話で、津波で妻と子を亡くし嘆き悲しんでいた福二が、月夜の晩に、亡くなったはずの妻が男と歩いているのを見かける。驚いて声をかけると、あの世で結婚前に好き合っていた男性と夫婦になっているのだと言って消えたという話である。

大平さんによれば、福二の妻子は実際に行方不明のままである。福二の子孫も今回の津波で妻を失くし、佐々木喜善と福二は遠い親戚にあたるとのこと。大平さんは、2011 年の大震災から半年ぐらい経ってこの話を語るようになった。最初のうちは、愛する妻が死後の世界で昔の恋人と一緒にいることを知った福二のことを可哀想だと思っていた。でも、今回の震災でも大勢の方が亡くなった家族や知り合いの方と再会する夢を見たという話を聞いたり、

イタコに死者の霊を降ろしてもらって「話ができて少し安心した」と話しておられる方のことを聞いたりしているうちに、福二は奥さんと再会できてよかったのではないかと思うようになったそうだ。

この第 99 話は、私自身も、2011 年から繰り返し繰り返し出会ってきた。最初に聞いた時には、何て話だと、正直、驚いた。でも、繰り返し出会い、考えたり感じたりするたびに、違った見方ができるようになった。

福治は、悲しみのあまり精神を病んでいたのではないか、今でいう PTSD のようではなかったかという話も聞いた。もしもそうだとすれば、民話は、復興や復旧についていけない苦しむ人々をも優しく包み入れるものなのだと思う。

民話は深い。

# 2017年12月 福島

## 12月1日(金) みんなの家、セカンド

12月1日（金)、会場となるこむこむに集合して、漫画展とプログラムの設営をすませた後、ビーンズふくしまが運営する「みんなの家」を訪問した。やはり、軒先には緑色のシートがかけられた除染土がある。

「みんなの家」には毎年お邪魔しているが、いつ行っても居心地がよく、誰をも暖かく受け入れてくれる雰囲気にほっこりする。

「みんなの家」は、子どもからお年寄りまで集まれる地域の場として2015年3月にオープンしたが、2017年4月、福島市の委託を受け、子育て支援センターとなった。震災に関わらず、一般に子育てしている人たちが集う。

それに伴い、2017年1月に復興交流拠点として「みんなの家セカンド」がオープンした。こちらは、避難してきた人や避難先から戻ってきた人たちが気軽に集え、悩みや不安を話せる場所である。

日常会話のことや子育てのことが話題になることが多いが、水の話、浄水器の話、家族の話なども出る。みんな背景は様々なので、そこで話されている内容も多様である。

スタッフとしては、ゆっくりできる場を提供すること、近すぎず、遠すぎない関係で話しやすい来やすい環境づくりを心掛けている。「たわいのない話」の大切さを大事にしている。

「大人の部活」というのもやっていて、たとえば、手作りをする「ちくちく部」や写真部など。緩やかな参加でルールを作らない気軽に足を運ぶ場所にしている。

また、福島にいるお父さんたちの会である「F パパの会」というのも月 1 回やっている。母子避難で生活が 2 つに分かれている家族で、祖父母と家族の板挟みになるケースもある。

食品の放射能測定もやっている。農産物にある放射線濃度を産地別に買ってきて、それぞれ測定して今の現実を見るという取り組みである。参加者である母親たちから、「世間は安全と言っているが、それが本当なのか自ら確かめて、その現実を受け入れて明日から強く生きよう」と声が上がったのだそうだ。

NPO 法人福島 30 年プロジェクトの協力を得て、選択した 3 県（福島、山形、茨城）の野菜（根菜やきのこなど）を使った豚汁を作って、放射線量を測る試みもしたそうだ。この NPO は、行政に代わるセカンドオピニオンを提供する非営利組織として 30 年にわたり放射能を監視し、福島での暮らしを回復するために、学びの場を提供している。

この時の結果は、福島が最も低い検出量であったということで、「農家の方の頑張りや，検査の徹底ぶりを改めて実感した。“自分で測る”ということは大きい。決して福島産が安全だといいたいわけではないが，お母さんたちが安心して暮らせるなら」ということだった。聞いていて、「福島の人たちがなぜこんな思いをしなければならないのか」と怒りを感じる一方、お母さんたちの不安をひとつひとつ丁寧に扱い、与えられた条件のなかで、しっかり生きていこうとする人々に尊敬の念を感じる。

また、若者中心にビーンズ農園を始め、そこで作った野菜を測定し、料理してみんなで食べているとのこと。フリースクール見学に行ったチームは、親子食事会でその鍋をごちそうになった。変化していくニーズを常に敏感にキャッチし、地域に根づいた活動を展開していると思う。それに、ビーンズさんの冊子やチラシのデザインはいつもおしゃれである。

課題としては，地域の方ともっとつながっていく必要があることをあげられていた。来てくれる人は増えたものの、まだ「避難してきた人のためのセンター」との認識が残っているらしい。子ども夫婦の避難や引越で孤独を深めている老人たちもいる。そんな人たちもつなげていくことができたらと。

「7 年の時間が経過した。そこには割り切れなければやっていけなかったこともある。ハード面は整ってきた」「活動を通して自主避難してきた人たちと再開できて嬉し待った」「復興支援は話を聞くことである」「自分で勉強しながら何ができるかを考えた。今、 7 年目に入ったが、福島の自殺率の高さなど課題が多い」など、当事

者でもあり支援者でもあるスタッフのみなさんの言葉の重みを感じる。

## 12月2日（土）こむこむプロジェクト

毎年好評の「クリスマスカレンダーをつくろう」は、今年も早々に満員締切となり、当日は、38人の子どもと15人の保護者が参加してくれた。スタッフ対応の限界から人数を制限しており、毎年お断りしなければならない方々があることは心苦しい限りだが、「去年は落ちたので、今年は真っ先に申し込みました！」と参加してくださった親子もあった。わいわいがやがやおしゃべりしながら、アイディアあふれる楽しいクリスマスカレンダーがたくさんできあがった。

いつものように東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃとマットを拡げた遊びコーナーも人気だった。

今年の漫画展は、13作品という過去最大数の作品展示となりました。漫画トークをにぎわい広場のオープンスペースでやったのは初めてだったふぁ、遊びコーナーで子どもを遊ばせている保護者や通りかかった人々も、断片的ではあれ耳を傾けてくれていたようで、良かったのではないかとも思った。

昨年に引き続き「遊びの講習会」を担当してくださったおもちゃコンサルタント小磯厚子さんとの再会も嬉しく、子どもや親子を見守る眼差しに同士を感じている。

## 12 月3日（日） 浪江でのプロジェクト

朝 8 時半に福島を出発し、国道 114 号線に入って、9 月 20 日に開通したばかりの浪江町帰還困難区域を走った。津島・室原間の 27km で、通行許可証を持つ町民が昼間のみ出入りできるだけ、二輪は今も通行不可ということで、出入り口にはガードマンが駐在していた。浪江と飯館、葛尾を結ぶ帰還困難区域内の 399 号線は今なお一般車両の通行止めが続き、道が閉ざされている。窓を閉めた車中であるが、途中、ガイガーカウンターがピーピーと警戒音を鳴らし（毎時 2.5mSv を超えると鳴るとのこと）、道路沿いには除染土を詰めたフレコンバックの山と塀、遠くに住む人々にはおそらく想像できないような風景がこの地の日常を形成している理不尽を見る。

浪江に入り、福島第一原発から 5km ほどの請戸地区で車を降りると、小高い丘に共同墓地があった。今年の 3 月に作られたばかりの真新しい慰霊碑もあり、死者・行方不明者 182 名のお名前が刻まれていた。津波の被害者ばかりでなく、餓死、つまり、津波に助かったのに、原発被害により救助活動ができなかったために命を落とされた方々も混じっていると聞いた。

2km ほど離れた海の方には茫漠たる光景が拡がり、堤防や防風林堤防の作業が行われていた。プロジェクトで東北に来るようになって、最初の 1~2 年、沿岸部で見た光景だった。その光景は年々変化していったが、避難解除されたばかりの土地は、まだ過去の時間の中にあるのだと思った。かつて、そこには人々が住んでいた。今は、白い塀に囲まれた除染度の黒い山があった。

海岸から 300m、原発から 6km の位置にある請戸小学校は遺構となっている。現在は立ち入り禁止となっているが、外観が残っているのことに驚く。時計は津波の襲った 3 時 38 分のまま、ずっと時間が止まっていたことを訴えているかのようだった。

絵本『請戸小学校物語-大平山をこえて』を頂いたが、これは、町の人から「請戸小の子どもたちが津波から助かった話を、避難中の町民に伝えて勇気づけてほしい」と頼まれた学生が、教員や保護者に取材を重ねて、発行したものだそうだ。請戸小学校には、当時 100 人程の小学生と教職員がいて、14 時 46 分に地震発生、51 分に避難の校内放送で校庭に集合。近所の人たちの「津波が来るから逃げろ」の言葉に、何も持たず、2km ほどある大平山へ向かう。4 年生の男の子の判断を取り入れ、15 時 15 分、大平山に入る。教頭が校舎を確認、最後に車で避難したのが 15 時 25 分で、そのすぐ後、15 時 38 分に津波が小学校を襲っている。小学校の時計はこの時間で止まっている。16 時には請戸地区全域壊滅し、16 時半に雪が降り始め、16 時 40 分、いわきの運送業者の大型トラックの人が全員を荷台に乗せてくれた。

浪江では 2 万人以上の住民が避難し、2017 年 3 月 31 日に全域避難指示は解除されたが、なお「帰還困難地域」が町内の大半を占めてる。10 月末現在で、人口 18,075 人 6,913 世帯のうち、居住人口は 418 人 293 世帯（浪江町 HP）。すでに移住して人口に入っていない人々もいることだろう。来年 4 月に新設の小中学校がスタートする予定だが、入学申し込みはまだ数人だという。

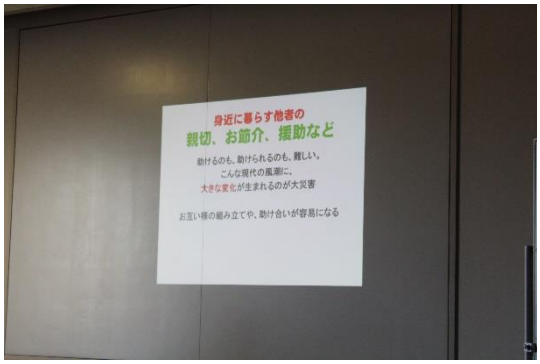
まち
machi
なみ
nami
まるしえ

P
浪江町役場

東日本・家族応援プロジェクト
団士郎家族漫画展
開催中
ご自由にお入り下さい

仮設商店でカレーを食べ、浪江町役場へ。休日のせいなのか、いつもそうなのかわからないが、人気は少なく、ひっそりしていた。1階ロビーには、現地の方々で設営してくださった漫画パネルがきれいに並んでおり、漫画トークには 10 名ほどが参加してくださった。こちらのスタッフとちょうど同じくらいの人数バランスになったので、4つの漫画の紹介後に設定された 4 回のペアトークでは、多くのペアで現地の方のお話を聞かせて頂くような形になった。1回のトークで4回のペアトークを設けるのは初めてだと思うが、それは功を奏したようだ。証人になるべく出向いている私たちへの気遣いなのか、あるいは外部者だから話しやすいのか、わずか5分で厚いパーソナルなストーリーを聞かせて頂くことになった。

「誰かに話そうにも、話す相手もない。町は、今、誰もいない。老人と、役場に人がいるだけ。子どもはいない」との声が多く、5分のトークが4回だけでも、話してもらえてよかったと思った。来年も訪れることができたらいいなと思った。



つづく